

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## 天気のマエストロ (巻頭言)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 関, 雄二 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/00008364">http://hdl.handle.net/10502/00008364</a>

[巻頭言]

# 天気のマエストロ

関雄二

(国立民族学博物館教授 アンデス文明研究会顧問)

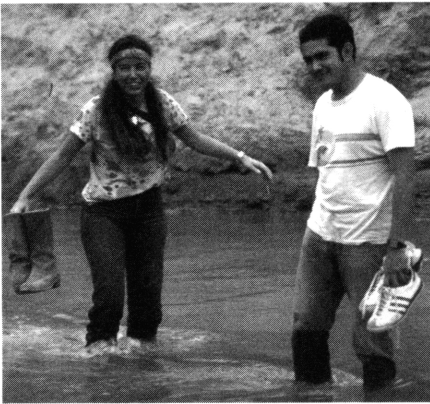


(写真1) 土砂崩れの現場を強行突破

天候の異変は世界的現象らしい。日本にいてさえ、上陸する台風の数が増加した、上陸する季節が変わってきた、冬に台風が発生したなどと聞くと、いよいよ地球はもたなくなってきたのかと心配したくなる。たしかに地球温暖化を温室効果ガスの増加と結びつけるかどうかの議論は、ERの原作者として有名なマイケル・クライトンが近著で根拠なしと主張するのを待たずとも、科学者の間でも合意はできていないようだ。しかしながら、私たちは、確実に地球全体が変化していることを日々感じている。

ペルー調査を開始した27年前、私を初めて迎え入れてくれた北高地カハマルカの気候は、今よりずっと寒かった気がする。ベッドには寝袋を忍び込ませ、その上から毛布を2枚もかけていた。週末の夜の楽しみであった映画鑑賞では、持ち込んだ毛布にくるまりながら、雨降りのように、乱れてはとぎれるスクリーンに目をこらしていたことも思い出す。

気候変動についていうならば、エル・ニーニョは、ペルーを有名にした自然現象といえよう。その原因は自転や大気循環を含む地球規模の現象と結びつけられている



(写真2)

エル・ニーニョの雨で突如出現した川を渡る考古学者（1983年関雄二撮影）右の人物はカルロス・エレーラ現国立シカン博物館長

が、赤道付近を季節的に移動する高温の水域が、異常な動きを示すことと連動している。その意味で、ペルーに限らぬ気候変動として近年では日本でも認識は深まっている。しかし、古くからペルー北海岸の漁師達の間で知られ、19世紀の末には、ペルー沖を通る航海士や地理学者らが記載していることもあって、長らくペルーの局地的な異常気象のようにとらえられてきた。

1982年から83年にかけて、リマの夏を過ごした私は、まさにエル・ニーニョに直面した。日本に比べれば過ごしやすはずの夏も、この年ばかりは猛暑となり、クーラーなどの備えのない部屋や車は灼熱地獄となった。低緯度地帯で、寒流が姿を消し、暖流になってしまうのだから、ボルネオや赤道ギアナのような熱帯雨林気候と似た環境ができあがったとしてもおかしくない。

この年、海岸の砂漠地帯に豪雨が襲い、南米大陸を縦断するパンアメリカン・ハイウェイは洪水で寸断された。この雨で、幾年もの間休眠していた種子が発芽し、数カ月前には砂漠であった場所が、いつの間にか草原に変わってしまった点には驚かされた。ここぞとばかり、持ち主のいない緑地帯に家畜を連れて暮らす人々が姿を現し、町の市場では、寒流産のヒラメやタイに代わって、極彩色の鱗を光らせたトロピカルな、お世辞にも美味しいとはいえぬ奇妙な魚が山積みされる光景を目にした。まだエル・ニーニョに対する知識も乏しかった日本では、ペルーの珍現象という扱いにとどまり、帰国後に新聞社からねだられた写真から得た収入は、学生の身にバブルの喜びを味あわせてくれたものの、豪雨で流された畑や倒壊した家の姿が頭から離れず、複雑な心境でもあった。

近年では、エル・ニーニョ現象を解明し、予測するために国際的な協力体制ができあがり、太平洋上に海水温を測定するためのブイが浮かべられ、監視されるようになったが、そのわりには予測が当たらない。日本でもペルーでも、マスコミは毎年のようにエル・ニーニョの来襲と騒いでは、いつの間にか何もなかったかのごとく黙りを決めることが繰り返され、言い過ぎかもしれないが、ペルーでは災害予防のためのプロジェクトや開発援助を引き出す常套文句となっている側面もある。

それに比べれば、私の予言の方がずっと確

率が高い。今年のペルー調査（本文参照）は、天候が不順で、晴天と雨や霧が繰り返されるやっかいな条件下で行われた。雨雲がやってくる方向はわかるので、予想は簡単そうなのだが、実はこれが少しも当たらないのである。確率が高いと言ったのは、私の予想の反対を想定すればよいという意味である。だから調査団員などは、私が「晴れる」と言うことを極度に恐れ、青空を見上げて「今日は良い天気だな」などとつぶやこうものなら、どよめきと罵声が浴びせられる有様であった。

しかしふざけていたのも一時のことであった。7月末の独立記念日に、私の指導する大学院生が単独で発掘している遺跡を車で訪れたとき珍事が生じたのである。アンデスの山間部ながら、アマゾンの上流域へとつながる、海拔は低いが熱帯性気候に囲まれた場所に向かう途中、怪しげな夕雲を発見した私は、「雨でも来い、雷でも来い、豪雨でも来い、崖崩れでも、鉄砲水でも来い」とふざけて叫んだ。その数十分後、私たちの顔はすっかり青ざめることになった。当たらぬはずの予想が当たったのである。雨が降って来た。雷鳴も頭上といえる近さで鳴り響き、我々を恐怖に陥れた。集中豪雨は数メートル先の視界を遮断した。車の屋根は、切り立つ崖からの落石で窪み、車前を猛スピードで転がり落ちる巨岩も目撃した。鉄砲水は、舗装された道路や橋を何か所も押し流した。暗闇の中で目の前に出現した土砂崩れの現場を一つ一つ登り、

進行方向に向かって石を投げ、道路が続いていることを確認しては、4WDのピックアップ・トラックで強引に乗り切った。命からがらの脱出とはまさにこのことである。その後、私は「先生」ではなく「天気のマエストロ（呪術師の呼称）」と呼ばれるようになり、自分の知らない力を発見した興奮を感じた。もちろん、すぐに凡人に戻ったことはいうまでもない。まるでエル・ニーニョ現象が過ぎ去り、草原が砂漠にかえていくように。



関雄二（せき・ゆうじ）

1956年東京生まれ。国立民族学博物館研究戦略センター教授ならびに総合研究大学院大学教授。専攻はアンデス考古学、文化人類学。1979年以来、南米ペルー北高地において神殿の発掘調査を行い、アンデス文明の母体作り上げられた形成期（前2500年～紀元前後）における社会の成立と変容を追究するかたわら、文化遺産の保全と開発の問題にも取り組む。

単著として『アンデスの考古学』（同成社）、『古代アンデス 権力の考古学』（京都大学学術出版会）、共編書として『文明の創造力』（角川書店、共編著）、『アメリカ大陸古代文明事典』（岩波書店、共編著）がある。